

〈論文〉

『詞八衢』証例に関する一考察
— 本居宣長記念館蔵『新撰字鏡』との比較を通して —

渡 辺 さゆり

1. はじめに

近世の文法研究書である本居春庭『詞八衢』は、動詞が活用する時に接続する種々の「てにをは」をもとに、動詞の活用を五十音図に基づいて体系的に整理し、さらに各行の「四段の活」「一段の活」「中二段の活」「下二段の活」ごとに詳細な説明を施したものである。その説明の中で各行各活用に所属する動詞を具体的に掲げ、その中のいくつかの動詞について古典文学や古辞書などを典拠とする例文（本稿では「証例」と称する）を、出典名を伴う形で列挙している。典拠となった古文献は『万葉集』『古事記』『源氏物語』『和名類聚抄』など多岐にわたるが、『新撰字鏡』もその典拠の中の一つである。

本居春庭は『詞八衢』執筆時、すでに失明しており¹、多くの証例²を独力で直接、種々の文献に当たりながら収集することは困難な状況であったと考えられる。この点について先行研究³では『古事記伝』など父宣長の著作を通じて得た情報を『詞八衢』に反映させたのであろうとの指摘がなされている。出典を「古事記」と記した証例が『古事記伝』に存在するのは当然のことながら「万葉集」や「日本書紀」を出典とした証例も『古事記伝』に認められるからである。また『古事記伝』以外にも宣長には『万葉集玉の小琴』『源氏物語玉の小櫛』など多数の注釈研究書があることから、春庭は宣長の著作に依拠しながら証例を収集したであろうとも指摘されている。

さて前述した通り、『詞八衢』証例の典拠は多岐にわたるが『新撰字鏡』もその一つである。『新撰字鏡』を典拠とする証例について渡辺（2018）では『古事記伝』以外に依拠した文献が存する可能性を示唆したのだが、この度、本居宣長記念館に蔵されている宣長自写本『新撰字鏡』を拝見する機会に恵まれた。本稿では『新撰字鏡』を典拠とする『詞八衢』証例と宣長自写本『新撰字鏡』を比較検討し、その結果を報告することとする。

2, 『新撰字鏡』を典拠とする証例について

2-1, 出典名「新撰字鏡」と「字鏡」について

『詞八衢』に記載された出典名「新撰字鏡」と「字鏡」については渡辺（2018）に詳しい。以下、簡潔に紹介する。

『詞八衢』で「新撰字鏡」を出典名とする証例は「加行四段」の例語「あがく」と「すみやく」の2例である。

あがく : 新撰字鏡に跪阿加久とあり

すみやく : 新撰字鏡に倅悍惶遽也於地加志古彌須彌也久

この2例の典拠を『新撰字鏡』とすることは問題ないと考えられるが、『詞八衢』には出典名を「字鏡」とする証例が25例存する。この出典名「字鏡」は『新撰字鏡』を指すのか、或いは『字鏡』や『字鏡集』など異なる古辞書を指すのか判断に迷うところである。この件について『新撰字鏡』『字鏡（世尊事本）』『字鏡集』の注釈で使用される文字種を比較したところ、『新撰字鏡』にはカタカナ表記が無く、万葉仮名を含めすべて使用される文字種は漢字であるのに対し、『字鏡（世尊寺本）』『字鏡集』は、万葉仮名による注記は僅数であり、カタカナによる音訓表記が多数存するという違いが認められた。

『詞八衢』において出典名を「新撰字鏡」「字鏡」とする証例を確認すると、両者とも同様に漢文注と万葉仮名による和訓が表記されており、カタカナは万葉仮名和訓への傍書と助詞「ハ」の書入れとして使用されているが、カタカナのみによる和訓表記は存しない⁴。また出典名「新撰字鏡」の2例は「加行四段」に属する例語「あがく」「すみやく」の証例であり、この2例の後に「新撰字鏡」という出典名は出現せず、それに代わるかたちで出典名「字鏡」が出現する。

尚、『古事記伝』においても『新撰字鏡』を「字鏡」と表記する例は頻出する。春庭が宣長著『古事記伝』の記載形式の影響を受けたと考えることは不自然ではないであろう。

以上から『詞八衢』では『新撰字鏡』について冒頭2例のみ出典名を「新撰字鏡」と記したが、その後は「字鏡」と省略形で記載したのであり、古辞書『字鏡』『字鏡集』との関連はないと判断した。

2-2, 『新撰字鏡』を典拠とする証例と『古事記伝』との関係

『詞八衢』に記載された証例について、盲目の春庭が直接文献に当たり収集したのではなく、本居宣長著作本に依拠するところが大きいとの指摘はすでに先行研究で述べられている。この先行研究に従い、渡辺（2018）では『新撰字鏡』を典拠とする27の証例について『古事記伝』に出典を求め比較検討を行った。今回改めて精査したところ、以下の3

例について『古事記伝』における記載を確認することができた。

①『詞八衢』加行四段

あがく 新撰字鏡に跪阿加久とあり

『古事記伝』⁵ 三十五之卷高津宮上卷

字鏡に跪蹠也踊也馬奔走兒阿加久また蹠阿加久などあり

②『詞八衢』左行四段

よこす 字鏡に讒與己須

『古事記伝』四十之卷穴穂宮卷

字鏡に讒與己須などあり

③『詞八衢』加行四段

なへぐ 字鏡に驪ハ足奈戸久馬

『古事記伝』四十三之卷近飛鳥宮卷

字鏡に驪足奈戸久馬ともあり

『新撰字鏡』を典拠とする27の証例中『古事記伝』に典拠を求めることができたのは3例であり、その他24例は確認することが出来なかった。このことから渡辺（2018）では、この両者の関連を積極的に認めることができないとした。そのうえで、『新撰字鏡』は「辞書」であり文学作品のようにストーリー性のある文章ではないので必要な情報をピンポイントで検索することができ、また春庭は盲目なので周囲の人たちの協力が必要であるが、『古事記伝』を介さずとも手元に『新撰字鏡』があれば、直接的な方法で必要な情報を採取することができたのではないかと推測した。つまり近世においては『新撰字鏡』も諸本が存在し、それらが流通していたと仮定すると、春庭の周辺にいずれかの『新撰字鏡』が存していたのではないかと考えたのである。

3、『新撰字鏡』抄録本について

『新撰字鏡』について現存する諸本は、大きく広本と略本（抄録本）との二系統に分かれる。広本として1124（天治元）年書写奥書のある宮内庁書陵部蔵本（『天治本』）が存する。しかしこの『天治本』（以下、「天治本」と称する）の成立は原本成立後200年以上を経ており、すでに増補ないしは誤脱が含まれていることも明らかとなっていることから、利用する際には抄録本との対照も必要であることが指摘されている。

抄録本は12巻系統の本から和訓のある項を抜き出したものである。大東急記念文庫（久

原文庫)本をはじめ、享和本、群書類従本などがあり、いくつかの系統に分かれるようである⁶。

阪倉(1967)によるとこの抄録本によって「ひさしく世にうずもれていた、この新撰字鏡という書物がひろく知られるにいたった」とするが、さらに以下のように記している。

京都大學附屬圖書館藏の伴信友舊藏書中の村田橋彦書写・伴信友校正書入の新撰字鏡(抄録本)の卷末識語に、

此一卷寛平年間所撰諸字音訓之古書也、近世不流布、明和元年申之春、江門加茂眞淵邨田春郷遊於京師、偶得古寫本於坊間、以秘藏焉、因得傳寫一校畢 明和八年⁷辛卯孟夏 邨田橋彦

としるされているような事情があったのであって、これは楫取魚彦も古言梯(明和元年成)の例言に、「新撰字鏡てふ書は・・・・吾友村田春海てふ人、京に遊べる時ゆくりなく得て、いとよろこびて もたりしを 乞もとめて 見るに云々」と言い、また、國會圖書館所藏の、石橋眞國が新撰字鏡の刊本に書入れをおこなった本の卷末に移寫した原本(村田氏をさす)奥書に、

右新撰字鏡一卷獲之平安書肆天王寺氏

寶曆十三年春三月 平 春海

とあることによって、たしかめられる。

以上を踏まえ阪倉(1967)では「寶曆十三年春、眞淵に従って京に遊んだ村田春郷、春海の兄弟が、たまたまその地の書肆でこの抄録本を発見して以来、ひろく知られて、古代語研究に利用されるにいたったのである」とする。

なお、現存する抄録本は、大東急記念文庫(久原文庫)本をはじめ、享和3年刊本(以下、「享和本」と称する)、群書類従巻497所収本(以下、「群書類従本」と称する)の他、今日まで伝わっているものは20数本を数えることができるが、いくつかの系統に分かれるとされている⁸。

4、宣長と『新撰字鏡』

村田春郷、春海が『新撰字鏡』抄録本を京の書肆で発見した「寶曆十三年」は、本居宣長にとって重要な年であった。

第一に、寶曆13年2月3日(旧暦)、長子の春庭が誕生した。妻かつの実家(津の分部町)で生まれたのだが、宣長のもとへは午後2時頃に津からの使いが来て、男の子が無事

生まれたことを告げたという⁹。

第二に5月（旧暦）、宣長は松阪の宿屋新上屋において賀茂眞淵と初めて対面した。所謂「松阪の一夜」である。宣長の『日記』に「廿五日・・・岡部衛士當所一宿始対面¹⁰」とあるが、眞淵が旅の途中、伊勢参りの際に松阪の宿に泊まり、そこへ宣長が訪問し対面が叶ったという。その後12月に眞淵門下への入門が許された¹¹。

ここにある寶暦13年の眞淵の旅であるが、『賀茂翁家集』巻之四「富士の嶺を觀てしるせる詞」の左注に「寶の暦十まり三とせの春、春郷・春海等と大和へまかる時に、此みねを見さけながらにしてしるしぬ」とあり、村田春郷・春海が同伴していたことがわかる。つまり賀茂眞淵が村田春郷・春海を伴い、寶暦13年春大和へ赴き、さらに同じく寶暦13年3月春郷・春海兄弟は京で遊んだ際にたまたま立ち寄った書肆で『新撰字鏡』の抄録本を発見した。その後5月に眞淵は松阪で宣長と対面したことになる。宣長の生涯で眞淵と対面したのはこの時だけとされているが、書簡でのやり取りは行われており、対面後、眞淵から『新撰字鏡』抄録本に関する情報を得たと推察することも可能であろう。

さて『新撰字鏡』についてであるが、宣長は『玉勝間』十四の巻で次のように述べている。

新撰字鏡は、かつて世にしられぬふみなりしに、めづらしく近きころ出て、古^レ學^ビするともは、あまねく用ふるを、あつめたる人の、つたなかりけむほど、序の文いと拙きにてしるく、すべてしるせるやう、いともゝゝ心得ぬ書也、そはまづ其字ども、多くは世にめなれず、いとあやしくて、から書はさらにもいはず、こゝのいにしへ今のふみどもにも、かつて見えぬぞ多かる、序の中に、皇國の諸書私記の字、漢國の數疏字書の文を取れるよしいへるは、いかなる書どもより取出たるにか、いともゝゝ心得ぬこと也、又字と注と訓と、おのゝゝ異事にて、おほくはあひかなはず、すべていとおつたなき書にぞ有ける、然はあれども、後^ノ世の偽^ハ書にはあらず、序に見えたる如く、寛平昌泰のころの物とは見えたり、されば拙きながらに、時代^{トキヨ}の上りたれば、おのづから訓はみな古言にて、和名抄よりまさりて、めづらしきこと多く、すべて彼抄をたすくべき書にて、物まなびせむ人の、かならず常に見べき書にぞ有ける、但し右の件のごとくなれば、字又注は、信^{タノミ}がたきこと多し、たゞ訓のかぎりをとるべき也、又假字づかひ正しくして、皆古書と合へり、美麗^{ウルハシ}を宇流^{ウル}和^{ワシ}之と書る一ツたがへるは、いかなることにか、又他^{ホカ}の書にはもれて、世にしられぬ假字の、此書に出たるも、すくなからず、そは殊にめでたし、

『玉勝間』において宣長は『新撰字鏡』を「訓」を除いて批判的に捉えていることがわ

かる。阪倉（1967）では「「字又注は信がたきこと多し、たゞ訓のかぎりをとるべき也」とまで言うのは、もちろん抄録本についてのことであって、天治本を見ればまた意見のかわったところもあったかと想像される」とするが、しかし「「字と注と訓とおのゝ異事にて、おほくはあひかなはず」という宣長の指摘は、やはりこれを否定することはできない」との見解も示している。

さて、この阪倉氏の記述から宣長が見た『新撰字鏡』は抄録本であることが明白であり、また抄録本を見た宣長は、掲出字や漢文注について疑問を呈しているものの、和訓の内容には肯定的であったことがわかる。このことは『古事記伝』の中に『新撰字鏡』を典拠とする注釈文は散見するが、その具体的な注釈内容は万葉仮名による和訓が主であることからもうかがい知ることができる。

5、本居宣長記念館蔵『新撰字鏡』について

宣長は『玉勝間』において上記の如く『新撰字鏡』を評価している。この『新撰字鏡』については三重県松阪市の本居宣長記念館に宣長が写したとされる『新撰字鏡』が存在する。

この度、本居宣長記念館のご厚意により宣長自写本『新撰字鏡』の調査を行うことができた。ここでその詳細について述べることとする。

<調査概要>

本居宣長記念館蔵『新撰字鏡』（第二門十五号）（以下、「宣長自写本」と称する）の調査は、2019年（令和元年）5月1日、本居宣長記念館にて行った。

「宣長自写本」の奥書等は以下の通りである。

奥書又は刊記：「明和七年寅九月廿九日書写終 本居宣長」と記す

著者：僧昌住

筆者：本居宣長自写本

図書名：新撰字鏡 全一冊／装幀 袋綴本冊子／表紙 灰色表紙

また「宣長自写本」の大きさは、タテ 27.7 センチ、ヨコ 19.0 センチ、全八十七丁からなり、オモテ・ウラとも上段下段各八行から成る。その他、注文内には朱による合点及び、修正・補注が存し、また青による補注も認められる。なお、これらの合点及び修正・補注について、前館長の吉田悦之氏から、朱は宣長、青は宣長か若しくは本居太平による加点ではないかとのご示唆をいただいた。

6. 『詞八衢』と「宣長自写本」との比較調査

この「宣長自写本」の調査結果をもとに、『詞八衢』中の『新撰字鏡』を出典とする27の証例について、「宣長自写本」との比較検討を行った。なお、『詞八衢』については、勉強社文庫『詞八衢』をテキストとして使用した。

その結果、『詞八衢』において該当する条文すべてを「宣長自写本」に見出すことができた。詳細は以下の通りである。

尚、『詞八衢』の27の証例を出現順に01～27とナンバリングし、証例ごとに例語と証例の内容を記載、次行に「宣長自写本」の該当条文を記載した。また「※」以下は筆者による補注である。

- | | | |
|----------|-------------------------------|------------|
| 01, あがく | 新撰字鏡に跪阿加久とあり | (上巻 17 丁ウ) |
| | 宣長自写本：跪 胡蘭反上蹠也踊也馬奔走兒阿加久 | (22 丁ウ下段) |
| | ※ ¹² 阿加久に朱合点 | |
| 02, すみやく | 新撰字鏡に怵悍惶遽也於地加志古彌須彌也久 | (上巻 20 丁ウ) |
| | 宣長自写本：怵憚 惶遽於地加之古弥須弥也久 | (85 丁オ下段) |
| | ※於地加之古弥須弥也久に朱合点 | |
| 03, なへぐ | 字鏡に驪ハ足奈戸久馬 | (上巻 21 丁ウ) |
| | 宣長自写本：驪 才安反足奈戸久馬 | (35 丁オ上段) |
| | ※足奈戸久馬に朱合点 | |
| 04, まじろく | 字鏡に喧ハ目數動貌萬志呂久とあり | (上巻 22 丁ウ) |
| | 宣長自写本：喧 戸澗市忍二反開闔目數動兒万志呂久又目太太久 | (17 丁ウ) |
| | ※万志呂久に朱合点, 目太太久に朱合点 | |
| 05, ゑなぐ | 字鏡に喉ハ出氣息心呻吟也惠奈久 | (上巻 23 丁ウ) |
| | 宣長自写本：喉 許伊反出氣息心呻吟也惠奈久又佐万与不又 | (18 丁ウ) |
| | ※惠奈久に朱合点, 佐万与不に朱合点 | |
| 06, おびやす | 字鏡に櫓又御於比也須とある ¹³ | (上巻 34 丁ウ) |
| | 宣長自写本：櫓御 同今作脇虚業反怯於比也須 | (78 丁オ上段) |
| | ※於比也須に朱合点 | |
| 07, てらはす | 字鏡に衙天良波須とあり | (上巻 38 丁オ) |
| | 宣長自写本：衙 胡麵戸見二反古文作眩乱也佰也天良波須又賣 | (77 丁ウ下段) |
| | ※天良波須に朱合点 | |
| 08, よこす | 字鏡に讒與己須 | (上巻 40 丁オ) |

- 宣長自写本：讒 仕感市含二反平毀也帆与己須又不久也久 (25 丁オ下段)
 ※与己須に朱合点, 不久也久に朱合点
- 09, しこづる 字鏡に譖ハ讒也志己豆 (シコヅ) とあり (下巻 03 丁オ)
 宣長自写本：譖 側禁烏禁二反去毀也諛也志己豆 (25 丁オ上段)
 ※也の下に青で○印, 志己豆に朱合点
- 10, あわつる 字鏡に惶急阿和豆 (アワツ) とあり (下巻 04 丁オ)
 宣長自写本：惶急 驚失意也於比由又阿和豆 (87 丁ウ下段)
 ※阿和豆に朱合点
- 11, ゆづる 字鏡に燂ハ以菜入湯云々奈由豆 (ナユツ) とあり (下巻 04 丁オ)
 宣長自写本：燂熾爛 同土洽徒牒二反以菜入漏湯曰燂煮也奈由豆 (10 丁ウ上段)
 ※奈由豆に朱合点, 漏の右傍に墨で○印, 上欄→涌 右傍に墨で○印
- 12, あがふ 字鏡に安賀布 (アガフ) などあり (下巻 09 丁ウ)
 宣長自写本：賄 古候反去贖也阿加不 (80 丁オ上段)
 ※阿加不に朱合点
- 13, てらふ 又字鏡にてらはすともあり (下巻 13 丁オ)
 ※宣長自写本に「てらふ」に対する記述無し。ただし、『詞八衢』の証例通り, 「てらはす」(上記 07) に「字鏡に銜天良波須とあり」とある。
- 14, もらふ 字鏡に餉寄食也毛良比 (モラ) 波无と見えたり (下巻 14 丁ウ)
 宣長自写本：餉 餉鮓
 三形同扨都反平饅也寄食也加由又阿佐利波牟又毛良比波无 (32 丁ウ)
 ※加由, 阿佐利波牟, 毛良比波无にそれぞれ朱合点
- 15, こぶる 字鏡に媚ハ古夫 (コブ) (下巻 17 丁ウ)
 宣長自写本：嫵 無主反媚也古夫 (29 丁オ上段)
 ※古夫に朱合点
- 16, しわむ 字鏡に酢を於毛氏志和牟 (シム) などあり (下巻 27 丁ウ)
 宣長自写本：酢 測板○上々酩面皴於毛氏志和牟 (16 丁オ上段)
 ※○の右傍に「反カ」
 ※皴於毛氏志和牟に朱合点
- 17, つひゆる 字鏡に瘠豆比由 (ツユ) とあり (下巻 35 丁オ)
 宣長自写本：瘠 才積反入瘦也豆比由 (24 丁ウ上段)

7、『詞八衢』証例と「宣長自写本」

『新撰字鏡』を出典とする27の証例とその証例に該当する「宣長自写本」の条文を上記(01～27)の如く列挙した。「宣長自写本」は、各丁オモテ・ウラとも、原則として上段・下段に分け、各段に掲出字が記載されている。ただし、注釈文が長文に亘る場合は、上・下段の区別なく注釈文が記載されている。注釈文の内容は、順に、音注（反切と声調）、漢文による義注、万葉仮名による和訓である。ただし「連字部」に音注の記載はない。また異体字が複数の時、音注の前に字体注が存する。

『詞八衢』における上記27の証例は、例語（和語である動詞）の古文献における使用例を掲載し、典拠を明らかにすることが本来の目的である。従って和訓が掲出字とともに掲載されるのは当然であるが、併せて漢文による義注が掲載される例も存する。ただし、字体注、音注（反切と声調）が証例中に引用される例は確認できなかった。以下に詳細を述べることとする。

7-1、掲出字と和訓を引用した証例について

はじめに『詞八衢』の証例に対し「宣長自写本」の掲出字と和訓が引用された例について説明する。掲出字に後続し和訓が引用された証例は上記01・03¹⁴・06・07・08・10・15・16・17・18・19・20・21・22・24・25・27の17例であった。この17例中、『詞八衢』と「宣長自写本」の間で、掲出字と和訓とも異同が認められないのは、01・03・06・07・10・18・19・20・21・22・27の11例である。また、これら11例に記載された和訓はすべて「宣長自写本」において朱合点が付された和訓であった。

17例中、この11例以外の6例については次の通りである。

08「よこす」は、和訓に異同はないものの、表記された和訓の万葉仮名が異なる例である。『詞八衢』では「與己須」、宣長自写本では「与己須」と、異体字の関係である「與」「与」をそれぞれ使用している。なお、「天治本」「享和本」「群書類従本」¹⁵ではすべて「与己須」であった。また「宣長自写本」において「与己須」に朱合点が施されている。

15「こぶる」は、『詞八衢』証例中において掲出字が異なる例である。『詞八衢』は「媚」を掲出字とし、宣長自写本の掲出字は「嫪」である。なお、「天治本」「享和本」「群書類従本」の掲出字はすべて「嫪」である。和訓は『詞八衢』宣長自写本ともに「古夫」で異同なく、また「宣長自写本」には朱合点が施されている。

さて『詞八衢』証例中の掲出字「媚」についてであるが、『古事記伝』の影響も看過できないと思われる節がある。『古事記伝』十三之卷（神代十一之卷）に「媚附は、許毘都伎氏と訓べし、媚字、常にも許夫とよみ、字鏡にも、嫪媚也古夫と見え、靈異記にも、媚

コビとあり」とある。「字鏡にも、嫵媚也古夫と見え」とあることから、『新撰字鏡』の掲出字は「嫵」であると推察できるが、その前後の条文から「古夫（コブ）」は「媚」の和訓であるとの解釈が可能である。この『古事記伝』の注釈が『詞八衢』における和訓の解釈に影響を与えた可能性もあるだろう。

16「しわむ」は『詞八衢』と「宣長自写本」で和訓に異同はない。ただし「宣長自写本」の朱合点が「𪛗於毛氏志和牟」と「𪛗」に付されている。「天治本」において「𪛗」の条文を確認すると「於」の直前に「也」が存することから、「也」までが義注であり「於毛氏志和牟」が和訓であることがわかる。「享和本」「群書類従本」は「也」の記載はなく、「宣長自写本」もこの系統を引き継いでいると考えられるが、「宣長自写本」における「しわむ」の朱合点は加点する位置の誤りと考えてよいのではないか。

17「つゆひる」は『詞八衢』と「宣長自写本」で和訓に異同はない。ただし掲出字の字画の一部が『詞八衢』は「月」,「宣長自写本」は「肉」と、異体字の関係である「月」「肉」をそれぞれ使用している。なお,「天治本」「享和本」「群書類従本」¹⁶ではすべて「肉」で表記されている。

24「にじる」は,『詞八衢』において和訓が「不弥尔志留」,「宣長自写本」では「不牟又尔志留」である。また「宣長自写本」では「不牟」と「尔志留」の2語に朱合点が付されている。なお,「天治本」「享和本」「群書類従本」は「宣長自写本」の如く「又」の前後に2語を記載する形式である。『詞八衢』はこの2語を複合語化し「不弥尔志留」として記載した形式をとっている。

25「ねぶる」は和訓が『詞八衢』では「弥夫留」,「宣長自写本」では「祢夫留」である。なお,「天治本」「享和本」「群書類従本」では「ねぶる」の「ね」はすべて「祢」と表記されている。『詞八衢』だけが「弥」であるが、これは誤写の可能性も考えられるのではないか。

以上,『詞八衢』の証例において掲出字と和訓を引用した例を検証した。和訓については『詞八衢』と「宣長自写本」で、表記上の相違がある例が若干存したものの、和訓自体に異同はなかった。また「宣長自写本」に朱合点が付され和訓が引用されていたことも確認できた。

7-2, 掲出字と義注及び和訓を引用した証例について

次に『詞八衢』の証例に「宣長自写本」の掲出字と義注及び和訓が引用された例についてである。これに関しては上記02, 04, 05, 09, 11, 14, 23, 26の8例が存する。この8例について『詞八衢』と「宣長自写本」と比較したところ,義注及び和訓に異同はなかつ

た。ただし、14「もらふ」と26「あざるゝ」以外の証例は『詞八衢』と「宣長自写本」の表記方法が異なる例が存した。以下の通りである。

02「すみやく」04「まじろく」の和訓、04「まじろく」05「ゑなぐ」の義注の表記に使用された漢字字体は、『詞八衢』では正字体であるの対し「宣長自写本」では、いわゆる通用字体である。

09「しこづる」の義注について『詞八衢』は「讒也」であるのに対し、「宣長自写本」は「讒」の略字が使用されている。

11「ゆづる」は「宣長自写本」に存する義注「以菜入漏湯曰燂煮也」を、『詞八衢』では「以菜入湯」のみ記載、後半を「云々」として省略している。「宣長自写本」ではこの義注内の「漏」に○を付し注を補い「涌」と修正しているが、『詞八衢』では「漏」「涌」とも記載していない。なお和訓に異同は認められない。

23「つはる」について『詞八衢』は掲出字の部首を「月」,「宣長自写本」は「肉」と、異体字の関係である「月」と「肉」をそれぞれ表記している。なお「天治本」「享和本」「群書類従本」はすべて「肉」で表記する。

以上はすべて表記上の問題であり、和訓そのものについて『詞八衢』と「宣長自写本」で異同はなく、また「宣長自写本」において朱合点が付された和訓が記載されていることも確認できた。

7-3, 「あがふ」と「てらはす」について

『詞八衢』証例中、12「あがふ」は「字鏡に安賀布などあり」と唯一和訓だけが記載された例である。「宣長自写本」では「阿加不」と表記されており、また参考までに「天治本」「享和本」「群書類従本」ではすべて「阿加不」と表記されている。他の26証例と異なり証例内に掲出字の記載もない。『詞八衢』における27証例中、特異な例である。

13「てらふ」は、証例の内容が「字鏡にてらはすとあり」であり、他の26の証例とは異なる形式の注釈である。ただし「てらはす」は『詞八衢』に証例として記載されており(上記07)、13「てらふ」の注釈は、文字通り「てらはす」へ導く条文が記載された例である。

8, 考察

以上、『新撰字鏡』を典拠とする『詞八衢』の証例(27例)と本居宣長自写本『新撰字鏡』を比較し、検証を試みた。

『詞八衢』は、動詞を「四段の活」「一段の活」「中二段の活」「下二段の活」及び変格の活(カ行・サ行・ナ行)に分類し、五十音図の行ごとに属する動詞(例語)を列挙、さらに春庭

が必要と判断した例語について、出典を伴う形で用例（証例）を明記した著書である。証例は、例語（和訓である動詞）を見出し語とし、その例語が古文献の中でどのように使用されているかを実証するために必要な情報といえる。『古事記』『万葉集』『源氏物語』などが出典として掲載されているのは前述した通りだが、本稿で取り上げた『新撰字鏡』を出典とする証例において、『新撰字鏡』の条文中、最も必要な情報は例語となる動詞の読みを万葉仮名で記した和訓であり、字体注や音注は必要な情報ではなかったといえる。さらに義注に関しても、和訓以上に必要な情報ではないといえるだろう。なお、春庭が『新撰字鏡』の和訓を重用した理由として、宣長の『玉勝間』における『新撰字鏡』の評価も忘れてはいけないと思われる。宣長は『新撰字鏡』について「たゞ訓のかぎりをとるべき也」と述べていた。この評価も春庭に大きな影響を与えたのではないだろうか。春庭にとって『詞八衢』を著すために重要なのは義注ではなく和訓であり、宣長の評価の影響も受け、『新撰字鏡』を「訓のかぎりをとるべき」書として読んでいたと思われるのである。

以上を踏まえ今回の調査をまとめると、上記 27 証例中、26 証例に和訓が認められ、さらに 25 証例の和訓は「宣長自写本」において朱合点が付された和訓であることが確認できたことになる。春庭にとって『新撰字鏡』掲載の和訓が最も必要な情報であったことが改めて推察できる。

例外となったのは 13「てらふ」と 12「あがふ」である。13「てらふ」は上述した通り、条文の内容そのものが 07「てらはす」へ導くものであった。12「あがふ」は、表記された万葉仮名が「宣長自写本」のみならず本稿で参照した『新撰字鏡』諸本とも異なり、今回の調査において課題を残した証例である。

その他として、15「こぶる」、24「にじる」、25「ねぶる」の 3 例は、注意すべき証例であると思われる。

15「こぶる」は『詞八衢』に「字鏡に媚ハ古夫」とあり、「宣長自写本」の見出し語は「嫵」であった。この違いに関し『古事記伝』の注釈内容も関与する節があることも上述したのだが、『詞八衢』の証例は宣長自写本『新撰字鏡』を典拠としながらも、『古事記伝』の注釈も考慮し、さらには『古事記伝』の注釈を優先したとも推察できるのである。宣長自写本『新撰字鏡』や『古事記伝』は、春庭の周辺に存在した宣長の著作である。これら宣長の著作がすべて、春庭の研究に重要な役割を果たしていたと考えることができるだろう。

24「にじる」は、「宣長自写本」において朱合点が付された「不牟」「尔志留」を複合語化したと思われる「不弥尔志留」が記載された例である。複合語とはいえ「宣長自写本」にある「不牟」「尔志留」の 2 語が関与したことは否定できないと思われるが、本稿ではその詳細は今後に譲ることとする。

25「ねぶる」は、『詞八衢』では「弥夫留」,「宣長自写本」では「柎夫留」と記載された例である。これは「柎」を「弥」と誤写した例ではないと思われる。

なお、『詞八衢』と「宣長自写本」を比較すると、内容に異同はないが表記が異なる例が若干、確認できた。例えば08「よこす」では『詞八衢』では「與已須」,「宣長自写本」では「与己須」と異体字で表記されていた。また09「しこづる」の義注では『詞八衢』が「譏也」と表記されていたのに対し「宣長自写本」は「譏」の略字が使用されている。ただし、このような表記上の相違は、春庭が盲目であり『詞八衢』の内容を実際に書写したのは春庭自身ではなかったことが関係すると考える。つまり、異体字表記や略字の使用は、春庭ではなく実際の書写者の判断に委ねられていたと考えるのがよいのではないか。春庭にとって重要なのは動詞の「訓」と古文獻において実際に使用されていたか否かという事実であり、文字表記上の問題は別に扱うのが妥当と思われる。

9. まとめ

本居春庭『詞八衢』における『新撰字鏡』を出典とする証例について本居宣長記念館蔵『新撰字鏡』との比較検討を行った。本居宣長記念館蔵『新撰字鏡』は、その奥書から明和七年に宣長が書写した「宣長自写本」であり、その注文内には朱による合点及び修正・補注、青による補注が認められた。朱は宣長、青は宣長もしくは本居太平による合点と推定されている。

『詞八衢』の『新撰字鏡』を出典とする27の証例中、17例は見出し字と和訓、8例は見出し字と義注・和訓が明記されているが、和訓に関し、表記された万葉仮名に異体字が認められる例も存したものの、和訓そのものに異同はなく、又採用された和訓は「宣長自写本」において合点が付されている和訓であることも確認できた。また宣長自写本『新撰字鏡』だけではなく『古事記伝』との関連も予想できる証例(01「あがく」,03「なへぐ」,08「よこす」)も確認することができた。したがって春庭は『詞八衢』執筆に際し、『新撰字鏡』を出典とする証例については、宣長自写本『新撰字鏡』や宣長著『古事記伝』を参照していたであろうと考えられる。ただし上記12「あがふ」のように「宣長自写本」及び今回の調査で参考とした『新撰字鏡』各諸本の条文とも関連が認められない証例も存することが明らかになった。しかしこのことは、春庭の周辺に多くの文献や資料が存在し、『詞八衢』を執筆するためにそれら多くの文献を実際に参照したことを裏付ける例とも考えられる。春庭は多くの文献・資料や情報が存する中で、多くの門下生や家族の協力を得ながら、盲目であるというハンデを乗り越えて自らの研究を進めていたと思われるのである。

【参考文献】

- 日本語学会編『日本語学大辞典』，東京堂出版，2018
- 西崎亨編（1995）『日本古辞書を学ぶ人のために』，世界思想社
- 足立巻一（1997）「本居春庭伝」（明治書院企画編集部編『日本語学者列伝』（日本語学叢書），明治書院）
- 阪倉篤義（1967）「新撰字鏡 解題」（京都大学文学部国語国文学研究室編『天治本新撰字鏡（増訂版）』，臨川書店，1967）
- 渡辺英二（1995）『春庭の語学研究 - 近世日本文法研究史 -』，和泉書院
- 渡辺さゆり（2015）「『詞八衢』における『古事記』を典拠とする証例について」（『比較文化論叢 31』，札幌大学文化学部）
- 渡辺さゆり（2018）「『詞八衢』証例に関する問題点 - 『新撰字鏡』を典拠する証例について -」（『札幌大学総合論叢』第 45 号，札幌大学）

【使用テキスト】

- 『詞八衢』：尾崎知光編『詞八衢』（勉誠社文庫 139），勉誠社，1990
- 『新撰字鏡』：京都大学文学部国語国文学研究室編『天治本新撰字鏡（増訂版）』，臨川書店，1967
- 『古事記伝』：大野晋編『本居宣長全集 第九巻』，筑摩書房，1968
大野晋編『本居宣長全集 第十巻』，筑摩書房，1968
大野晋編『本居宣長全集 第十一巻』，筑摩書房，1969
大野晋編『本居宣長全集 第十二巻』，筑摩書房，1974
- 『玉勝間』：大野晋編『本居宣長全集 第一巻』，筑摩書房，1968
- 『日記』：大久保正（担当編者）『本居宣長全集 第十六巻』，筑摩書房，1974
- 『賀茂翁家集』：久松潜一監修『賀茂真淵全集 二十一巻』，続群書類従完成会，1982

- 1 渡辺（1995）「第一章 語学研究の動機」「第一節 略歴」参照。春庭は寛政 6 年（1794）六月以降に失明した。数えて 32 歳であった。
- 2 渡辺（1995）「第四章 証例と例語」参照。『詞八衢』における例語数 1508 語中証例を有する語 433，その証例 867 例とする。
- 3 渡辺（1995）「第四章 証例と例語」参照
- 4 『詞八衢』の波行四段「てらふ」に対し「てらはす」という和訓が平仮名で表記されているが，これは左行四段「てらはす 字鏡に銜天良波須とあり」を踏まえての条文である。
- 5 『古事記伝』は『本居宣長全集』をテキストとした。凡例に「底本の異體字・變體假名は正字體・通用の假名に改めた」とある。
- 6 『日本語学大辞典』『新撰字鏡』及び西崎（1995）「新撰字鏡」参照
- 7 阪倉（1967）では明和八年（マ）は誤りとしている
- 8 西崎（1995）「新撰字鏡」参照
- 9 足立（1997）参照
- 10 「岡部衛士」は賀茂真淵，「一宿」は松阪にある新上屋。（『本居宣長全集巻十六』補注参照）
- 11 宣長の『日記』寶暦 13 年 12 月 28 日に「去五月，江戸岡部衛士賀茂縣主賀茂真淵当所一宿之節，初対面，其後状通入門，今日有許諾之返事」とある。
- 12 ※以下は筆者注
- 13 続けて「これのみにて外になしもしは加の字の脱（忤）たるにはあらざるか」とある。

- 14 03「なへぐ」に対しては「足奈戸久馬」と万葉仮名だけの表記形式ではないが、宣長の朱合点が付されている。
- 15 京都大学文学部国語国文学研究室編『天治本新撰字鏡（増訂版）』を使用テキストとした。
- 16 京都大学文学部国語国文学研究室編『天治本新撰字鏡（増訂版）』を使用テキストとした。

【付記・謝辞】

本稿は2019年度札幌大学研究助成（研究課題「『詞八衢』における『新撰字鏡』の利用に関する研究」）による研究成果の一部である。

また本居宣長記念館蔵『新撰字鏡』の閲覧に際しては本居宣長記念館並びに元館長吉田悦之氏に格別なる御高配を賜った。併せて吉田悦之元館長からは本資料に関する貴重な御教示も賜った。記して厚く感謝申し上げる。